❶現在の奄美市街地と名瀬港

奄美群島の振興開発

日本復帰60年 南海に浮かぶ島々は日本の宝から、世界の宝へ

今年、日本復帰60周年を迎える奄美群島は、日本の離島地域としては最も多い約12万人が暮らし、独自の文化と豊かな自然を有する地域です。その一方で地理的、歴史的条件から、明治維新後、日本が急速に近代化するなかで、奄美群島の開発は遅れ、本土との格差は広がるばかりでした。

昭和3年になってようやく政府が開発事業を開始。製糖施設の建設、港湾や道路の整備などが進められ、黒糖や大島紬などの物産の出荷は増加し、島民の生活も少しずつ改善されつつありました。

しかし、昭和20年の太平洋戦争終戦により、奄美群島はアメリカの統治下に置かれます。日本に復帰する昭和28年までの8年間本土との交流は絶たれ、経済は停滞しました。

日本復帰直後から、政府による奄美群島の復興事業が始まります。復興のためには産業振興、公共施設や交通網の整備、かんがい事業など、あらゆる面で大規模な開発を必要としたのです。

立ち遅れた奄美群島の経済再生のために、まずは、ヒトとモノが動けるようにすること。そこで、各島の

広告

❷瀬戸内町古仁屋小学校で行われた復帰祝賀会（昭和28年12月）　❸昭和43年に開港した喜界空港の第一便　❹徳之島町亀徳港（昭和35年頃）
❺復帰間もない頃の徳之島町母間（昭和30年頃）　❻沖永良部空港開港（昭和44年5月）　❼与論空港開港（昭和51年5月）

港湾が整備され、大型船が接岸可能になりました。最大の港湾は奄美市の名瀬港で、現在は3万トン級の船舶が入港でき、奄美の経済を支える物流拠点として、また東京、大阪、鹿児島などと行き来するフェリーの発着場として活用されています。空港も急ピッチで整備され、昭和37年の徳之島空港を皮切りに、奄美大島、喜界島、沖永良部島、与論島で開港し、さらに徳之島空港は昭和55年に、奄美空港は昭和63年にジェット機の離発着が可能になりました。

産業振興では、各島で、基幹作物のさとうきびや花き、バレイショ、ゴマなどの産地が育っています。また、水資源確保のため、徳之島神嶺（しんれい）ダム（昭和59年完成）、奄美市にある須野ダム（平成9年完成）、喜界島地下ダム（平成15年完成）なども整備されました。

このように、昭和29年に奄美群島復興特別措置法が施行されて以来、60年近くにわたって振興開発事業が実施され、振興開発のための各事業は一定の成果を挙げ、奄美群島の人々の生活を向上させてきました。

平成21年には、「人と自然が織りなす癒やしの島・奄美の創造」による奄美群島の自立的発展と豊かな住民生活を実現することを目標に、新たな奄美群島振興開発計画が策定され、平成28年の世界自然遺産登録に向け、人と自然が共生する地域づくり、奄美群島が一体となった観光物産の情報発信などを推進しています。

今後も自立的発展と豊かな住民生活の実現に向けて、奄美群島の魅力と特性を生かし、島民、各地域・各団体と行政が一丸となってチャレンジしていく新たな振興開発が期待されます。

主な奄美群島振興開発事業

事業内容	完成年度
伊仙町における闘牛など伝統文化の保存継承と活用を図る徳之島地域文化情報発信施設の整備	平成２４年度完成
奄美市における情報通信産業を育成するための施設（ICT プラザかさり）の整備	平成２４年度完成
喜界町などにおける営農用ハウス等の整備	平成２４年度完成予定など
与論町における一般廃棄物最終処理施設の整備	平成２５年度完成予定
龍郷町などにおける防災関連施設の整備	平成２６年度完成予定など
瀬戸内町における網野子バイパスの整備	平成２６年度完成予定
徳之島及び沖永良部島における畑地かんがい施設の整備	徳之島（平成２７年度完成予定） 沖永良部島（平成３０年度完成予定）